



愛情不足の子どもには

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子



近年、自己中心性が強く年齢相応に成長していないと思われる子どもが増えているようです。

順調な時はいいのですが、いったん気分をそこねると、とたんに別人格になったかのように、表情や言動が変わってしまいます。相手が教師であろうと友達であろうとおかまひなしです。

あたりかまわずそばにいる人をけとびしたりこづいたりする子、教室をとび出す子、大泣きする子などなど。

また、静かにしてはいても、反抗的とか見えない行動をとる子もいます。授業中なのに本を読む子、席を立ち教室のすみで外を見たり勝手なことをしたりする子などがその例です。

これらの子どもは、たとえやめさせようとしても、またすぐ違った問題行動をとってしまうます。どうしてこうなってしまうのでしょうか。

○Aさんの事例から

ある時、それがわかるような典型的な事例に出会いました。四年生のAさんのことです。

Aさんはその時、気分が高揚しているようでした。じっとしていられず、授業中なのに立ち歩き、友達にちよっかいをかけていました。担任の新米先生は、注意すればすぐ荒れるということで、Aさんのなすがままにさせていました。友達も多く、「ああ、また始まったか」といった感じのにやにやしたり、やり過ぎしたりしていました。

ところがAさんは、何がきっかけだったか急に荒々しくなり、放っておくことができなくなりました。そこで体の大きかった新米先生は、Aさんを抱き上げ校長室へ連れて行きました。するとどうでしょう。Aさんは新米先生に抱かれていた間、ずっと喜色満面で脚をバタバタさせているではありませんか。その上、先生にしがみつくと動きも見せませんでした。

その後Aさんは、先生に甘えられるのが嬉しくて仕方ないといった様子を見せるようになり、驚くことに《えんぴちゅ》などと、口から幼児語がとび出すようにさえなつたのです。

それを見た私は、「Aさんは幼かったころ、まわりの大人から愛情を示されなかった分、今それを

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

先生に求めているのではないかな。だから、先生はうんと甘えさせてあげれば良いと思うよ」とアドバイスしました。

でも、さすが四年生。甘えも幼児語も、一か月は続きませんでした。ある程度満ち足りてくると、恥ずかしさを感じるようになったのだと思います。

Aさんにはもともとひょうきんなどころや優しいところがあつて、学級の友達から必ずしも嫌われてはいませんでした。Aさんを包み込むような雰囲気も学級にあつたのです。

それで新米先生は、Aさんのよいところを学級のみんなの前で指摘することによって、その雰囲気さらに持続、発展するように努めました。すると、終わりの会などで、Aさんのよいところを指摘し、称賛したり感謝したりする子が現れました。このことは、Aさんにとって嬉しかったに違いありません。

これは、成育歴の中の愛情不足が原因で問題行動をとってしまう、あまりにもわかりやすい事例でした。

○子どもの思いに耳を傾ける

私は思います。このような事例は、近年顕著です。時代の変化によるものでしょう。物質的な豊かさにより、一部の大人社会では、享乐的、利他的な生活が増えています。それにより子どもも、我慢

とか根気とか持久力とか、そういったものを身につける機会を失いつつあります。

では、どうしたらいいのでしょうか。まず言えることは、このような子どもに対しては、言つて聞かせたりお説教したりしても、効果はないということです。それどころか、むしろ反発するだけだと思います。そうではなく、子どもたちの思いを聞くことに努めるといいでしょう。その上で、

「くやしかったのか。それでぶつてしまったのだね。今はどんな気持ちかな」

「お友達は何もいけないうことをしてない」ということでもいいの」

「えらいよ。自分がいけなかったと言えたのだね。反省できたのだね。すごい」などと声をかけましょう。

そして、ふつうなら当たり前のことでも、過去の行動とくらべてほめてやることが大事です。それも、学級のみんなの前でほめるようにします。

もう一つ。その子の「いいところ探し」をするようにしましょう。これもみんなの前で指摘するようにします。友達がその子のいいことを言うようになったらしめたもの。友達の力は愛情不足の子どもの変容を力強く支えてくれるでしょう。さらに、その子を支える友達もほめるようにすることが重要です。いや、ほめるのもいいですが、支えてくれること



を喜ぶという姿勢が、さらに望まれます。愛情不足ゆえの問題行動に対しては、子どもにわかる愛情をふり注ぐことしかありません。また、教師が全てに対応するのではなく、子どもの力も借りるようになるというでしょう。それは、学級集団をきたえることにもつながります。

最後に言いたいこと。いけないことはいけないとしながらも、受容的な姿勢で臨むことは、何も問題行動の多い子どもに対してだけではありません。どの子に対しても一貫させたいもの。それによって、人間性豊かで、よくまとまった学級を創ることができるのだと思います。